

コース

近鉄寺田駅 JR城陽 水度神社 鴻の巣展望 森山遺跡 中天満神社 橘諸兄別荘跡 蟹満寺 春日神社 椿井大塚山古墳 松尾神社 高麗寺跡 泉橋寺 小野小町塚 泉大橋 木津 JR平城山 磐之媛命陵 宇和奈辺陵 平城宮跡 近鉄大和西大寺駅

山背古道（やましるこどう）の見どころ

山背古道は城陽市から井手町、山城町を経て木津町へと続く、南山城地方の古くからの道の一つ。周辺には遺跡や文化財をはじめ、豊かな自然が広がり、道をたどると悠久の時の流れを旅するような、そんな不思議な感じがするコースです。

この南山城の地は、古くは朝鮮半島からの渡来集団が移住した、この地域は奈良時代には大狛郷と呼ばれ、仏教文化の華を咲かせた。泉川（木津川）に最初に橋を架けたことで知られる僧行基、その行基が開山した泉橋寺、前述の高麗寺跡、蟹の恩返しの説話寺として有名な蟹満寺、聖徳太子の創立と伝えられる神童寺など古代からの寺々が戦火に見舞われながらも、今でもこの地に息づき、また、南山城最古の祭りとして残る居籠祭で有名な湧出宮もこの地である。

渡来人の里ともいふべき山城町には、数多くの古墳、古代の遺跡が現存している。いまや古墳研究の基礎となる遺跡として、考古学を学ぶ者の中で知らない人はいないと言われ、卑弥呼の鏡30数個が出土した椿井大塚山古墳をはじめ、全長110mの前方後円墳の平尾城山古墳、隣接する直径33mといわれる円墳の北河原稲荷山古墳などの前期古墳。

渡来人の墓と報道された千両岩古墳群をはじめ、上狛・椿井・綺田など多くの地域に存在する古墳時代後期の群集墳はどここの地区にいても見ることができる程である。

山城は『古事記』では「山代」、『日本書紀』では「山背」と記され、794年（延暦13年）平安遷都にともなう詔によって「山城国」と改められた。この地の山代 山背 山城と表記の推移には、歴史的展開があり、京都と奈良、そして大阪につながる水陸の要域に位置していた。『古事記』や『日本書紀』には、淀川 木津川 奈良山 大和へのル-トがはっきりと浮かびあがり、さらには、京都・近江・伊賀への要路にもあった。とりわけ近江への道は北陸路へとつながり、「越の岸」へ到着した、高句麗使節や渤海使節がこの道をたどり大和へおもむく。したがって南山城の地に高麗館（コマヒムロツミ）や相楽館（さがらかのムロツミ＝使節迎賓館）が設けられたのである。

南山城の渡来集団のなかで重きをなした高句麗系の人々の数多く居住したのは、山城町を中心とした地域であろうことは想定でき、山城町の上狛には狛氏が建立したと伝えられる「高麗寺跡」が国の指定史跡として今に残されている。

水度神社

本殿は一間社流造、正面千鳥破風付、檜皮葺、国の重要文化財に指定され、室町時代の1448年（文安5年）に建てられ、祭神は、天照皇大神、高皇産霊神、和多都美豊玉姫命です。なお、例祭は、毎年10月2日で、神輿渡御の時、威儀を正した行列と獅子が出て賑わいますが、この頃は雨が多く「カサ祭」と呼ばれます。

森山遺跡

昭和51年宅地造成中に発見され、約4000年前の縄文後期～約1400年前の古墳時代までの集落の跡で、縄文時代は広場を中心に6棟の竪穴式住居がU字形に並び、集落の南端に配石遺構と呼ばれる墓も見つかри、20～30人が住んでいた様で、また、古墳時代は住居跡10棟、方形周構の盛土から土器も出土し、縄文時代の集落跡としては南山城で唯一の遺跡です。

中天満（なかつんまん）神社

旧中村の産土（うぶすな）神で、祭神は、菅原道真です。創建および沿革は、明らかではありませんが、社殿に残されている棟札（むなふだ）の中で最も古いものとして、慶長十一年（1606年）のものがあり、本殿は覆屋（おおいや）を持つ1間社流造、檜皮葺で、正面の梁上の蛙股（かえるまた）に古い様式を示す鳥獣の透彫が見られます。また、江戸時代に、境内で「雨乞い」が行われ、1867年（慶応3年）の「おかげ踊り」を描いた絵馬が拝殿の正面の上に掲げられています。

蟹満寺

普門山と号し、かつては紙幡寺、加波多寺ともいわれ、白鳳期の末期に創立されたものと考えられている。「古今著聞集」や「今昔物語集」に出てくる“蟹の恩返し”の縁起と国宝釈迦如来坐像で有名なお寺でこの本尊である釈迦如来坐像の安置してある本堂は、1759年（宝暦9年）に建築されたもの。本尊は縁起によれば観世音菩薩であるが観世音菩薩は現在観音堂に安置され、国宝の釈迦如来が本尊となっている。

7世紀はじめに、渡来氏族、秦氏のリーダーの秦川勝が泉川（現在の木津川）の北のほとりで聖徳太子と仏教の興隆を約しました。その頃、秦川勝は聖徳太子から、新羅から献上された金銅弥勒菩薩像を賜り（推古天皇紀11年）、安置するために葛野の太秦に広隆寺を創建しました。さらに広隆寺の末寺として、現在の「蟹満寺」の地に、川勝が「蝦蟆寺」を創建（『太子伝古今目録抄』）したとも、或は、川勝の弟で秦和加（阿津見長者）が「薬上寺」または「蟹幡寺」を創建（『広隆寺末寺別院記』）したとも伝えられている。

葛野の秦寺（広隆寺）の末寺であったことから、当初は綺原（カムバラ）の秦寺（ハタデラ）と呼ばれていたのが訛って「カムハタ寺」に転化し「蟹満多寺」や「紙幡寺」と表記されるようになったと思われる。

その後、平安時代初期には、この一帯は、「蟹幡郷」（『和名類聚抄』934年）といわれています。それが、南山城の蟹伝説と結びつき、上記の蟹の縁起が成立したようだ。

椿井大塚山古墳 卑弥呼の鏡を配った？豪族の墓

1953年、国鉄奈良線の法面拡幅工事中にぼっかりと穴が開いた、この石室から青くさびた古鏡が続々と出た。その数は37面といわれるが、回収された物がそれだけで、実際数は不明という。この古墳が余りにも有名になったのは、この出土した鏡のうち33面が三角縁神獣鏡であったこと、この三角縁神獣鏡は中国製の、魏王朝から卑弥呼へ下賜された鏡であるとされている、ことから一躍「卑弥呼の鏡」が大量出土したと報道されたことによる。

この古墳の存在は古くから知られていたが、この出土を契機に緊急調査が行われた結果、従来いわれ

ていた円墳ではなく、全長180mを測る前方後円墳と判明、3世紀後半に築造された日本最古に属する古墳と認められた。JR線に真二つに後円部を断ち切られた不運なこの古墳も、やっと日の目を見るように、発掘調査がなされ国指定史跡への道を歩きつつある。

立地条件(古代大和王権の背後)と武埴安彦の乱(記・紀 崇神天皇の条)の言い伝えに残るこの地方の地位と位置を考えると、古代ヤマトの関わりから壮大なロマンがこの古墳から感じられる。

松尾神社

天武天皇が吉野山から東国へ向かう時、この地で大山咋神の化身「樺井翁」と軍議の後、翁が姿を消した跡地に宝珠を埋めましたが、701年(大宝元年)秦都理が霊夢によって宝珠を得、それを神体として宮殿を創建したのが当社の始まりで、拝殿と表門は、桃山時代に造立され、拝殿棟木の墨書から1610年(慶長15年)再建し、本殿は1808年(文化5年)奈良春日社の若宮本殿を移築していますが、表門西側の塀は、現存する国内最古の土塀です。

千両岩古墳群 渡来人が葬られた

JR上狛駅の南がわの農道を木津川ぞいに東へ行けば、高麗寺跡に出る。さらに東へ進めば京都府立山城郷土資料館に着く。この北側の丘陵地にあるのが千両岩古墳群。1994年5基の古墳が調査され、15~20mの円墳であることが確認された。そのうち3基からは横穴式石室が検出され、2号墳には右片袖式玄室があった。さらに6世紀半ば以降の渡来系模様の馬具の一部が見つかった。このタイプの玄室を持つ横穴式石室は、朝鮮半島から伝わり、渡来系古墳として知られる。近くの高麗寺の伝承と併せて、この古墳群は狛(高麗)氏が埋葬されたのではないかとの推測がなされた。渡来人の里として一時代を築いたこの地の高麗人はどのような想いでこの墓に葬られたのだろうか。

高麗寺跡

京都府における最古の寺院跡の一つで飛鳥時代から平安時代まで存続していました。当時は高句麗(朝鮮半島)からの渡来人の活躍がめざましく、この地の豪族であった新興勢力の狛氏によって建立されたといわれている。

創建期には、蘇我馬子が創建した奈良県明日香村の飛鳥寺創建瓦と同じ軒瓦が使用されており、7世紀初頭に造営が開始されました。本格的な伽藍整備は、やはり天智天皇により創建されたと考えられる奈良県明日香村の川原寺創建瓦と同じ軒瓦が使用されており、大津宮遷都(667年)前に開始されたものと考えられます。高麗寺の廃絶についてははっきりとしませんが、長岡京期(8世紀末)での修理を最後として、平安時代末頃(12世紀代)までには完全にその命運が尽きたと考えられる。

文献資料では、『日本霊異記』に天平年中のこととして高麗寺僧栄常の記事があり、『今昔物語集』他にも同様の説話が収録されています。また、『播磨増位山随願寺集記』(姫路市随願寺蔵)には、中世の縁起ではありますが、天平15年(743年)3月、興福寺・薬師寺・播磨増位寺の僧等が内裏(恭仁宮)で読経した後、増位寺僧栄常が高麗寺から戻らなかったとしている。なお、高麗寺跡の地は、相楽七郷中の大狛郷に属し、高句麗からの渡来系氏族狛(高麗)氏の氏寺として創建されたと考えられている。

小野小町塚

小野小町は、平安時代前期の女流歌人で、六歌仙の1人、840年頃(承和年代)仁明天皇の時代に宮廷に仕えた事は確かですが、その生涯は謎に包まれています。「冷泉家記」によると、「小町六十九才井手に於いて死す」とあり、また「百人一首抄」にも「小野小町のおはりける所は山城の井手の里なりとなん」と記されており、小野小町は、晩年を井手で暮らした様です。

色も香も なつかしきかな 蛙鳴く
井手乃わたりの 山吹の花 「新後拾遺和歌集」

泉橋寺

本尊は「阿弥陀如来」、740年(天平12年)行基が泉川(今の木津川)に「泉大橋」を架けた時に創建した泉橋院(発菩薩院、隆福尼院)を前身とする寺院で、行基が五畿内に造営した49院の1つです。1180年(治承4年)12月28日平重衡が南都攻めをした時に焼かれて、その後再建されましたけど、14世紀元弘ノ乱でも兵火で焼失したが、境内やその周辺から奈良時代の古瓦が出土して、その時代の塔の心礎も存在し、塔が建っていた事が知られています。

「泉橋寺」の「本堂」北側の横手に、「五輪塔」が建っています。奈良時代、聖武天皇の皇后、光明皇后の御遺髪を祀るために建立された塔と伝えられていますが、そもそも「五輪塔」は、宇宙を形成する根本の要素である空風火水地を現し、上から宝珠形の空輪が空、半円形の風輪が風、三角形の火輪が火、円形の水輪が水、方形の地輪が地で、これらを積み重ね宇宙を象徴的に現した供養塔です。なお、この「五輪塔」は束石(つかいし)の間に羽目石(はめいし)を置き、その上に葛石(かずらいし)の盤を置いてから、框座(かまちざ)の上に複弁の反花(かえりばな)を設けて、その上に高さ212cmで安置されております。

「泉橋寺」の山門を出たすぐ右脇に「山城大仏」と呼ばれる丈六の大きな「石造地蔵菩薩坐像」が鎮座しています。願主は般若寺の真円上人です。なお、今は露座ですが、1295年(永仁3年)地蔵石材が切り出し初めてから13年後、1308年(徳治3年)に地蔵堂が棟上され、供養された時は、堂内に安置されておりました。その後、1470年頃から応仁ノ乱が南山城地方にも及び、1471年(文明3年)大内政弘の軍勢が木津や上粕を攻めて焼き払った時、泉橋寺の地蔵堂も兵火で焼かれて、石仏が損傷し、それ以来、地蔵石仏は、露座のままで、頭部と両腕は江戸時代になって、1690年(元禄3年)に補われています。